

「広報誌「こんにちはせいてつ病院です」で連載しているインタビュー企画です。

地域に根ざす病院として、医療情報だけでなく、
北九州でいきいきと活躍する方々の人生や思いを1000文字でご紹介しています。

ここでしか読めないリレーコラムです。

ここでしか読めないリレーコラム⑱

北九州のキラリ人からの1,000文字。



切り絵作家

こすげ のりかず
小菅 績憲 さん

東京都出身。写真家を目指し、留学していた米国で切り絵と出会う。2004年から北九州市在住。2023年に「北九州百景・前編」を刊行、2025年に北九州市民文化奨励賞を受賞。今年7月に後編を発行。切り絵教室の講師やデザイン制作など幅広く活動している。

切り絵で伝える北九州の魅力

切り絵との運命の出会い

米国の短期大学で写真を学んでいた頃、デザインの課題が出ました。「日本らしい表現」を取り入れようと、挑んだのが切り絵でした。紙とカッターだけの手軽さにも惹かれましたが、白と黒だけで、豊かな世界を表現できる奥深さに魅了されました。

帰国後、カメラマンとして活動していましたが、時代はフィルムからデジタルへと大きく変わる転換期。「自分にしか表現できないものをつくりたい」と、切り絵作家として歩む決心をしました。

北九州という創作の舞台

私は不器用な方ですし、東京の下町育ち、かなりせっかちな性格です（笑）。それでも切り絵に向かい、試行錯誤を重ね、納得のいく作品が生まれるまでに十年以上かかりました。

２００２年、知人を頼って水巻町へ移住し、２００４年に活動拠点を北九州市に移しました。私にとって北九州は、「どこか懐かしい街」です。海や山、歴史、祭り、市場、古い橋、路地裏など、歩けば歩くほど心を動かされる風景に出会えます。その魅力的な風景が、今も私の創作意欲をかき立てています。

一枚に込める北九州の魅力

作品を制作する前は、何度も現地へ足を運びます。時間帯を変えながら光や影の表情を確かめ、構図を練り、黒い紙に向き合います。切り絵独特の奥行きや空気感を大事にしています。

２０２３年に作品集「北九州百景・前編」を刊行し、２０２５年に北九州市民文化奨励賞を受賞しました。独学で歩んできた私にとって、自分の道は間違っていなかったと背中を押していただいたような、大きな励みになりました。今年７月に後編を出版し、二十年以上かけて取り組んできた「北九州百景」が完成しました。一つのテーマで百点を作り上げることは、以前からの目標で、その題材が北九州だったことを、とても幸せに思います。

これからも、この街を歩き続ける

これからも自分自身が納得できる一枚を、一つひとつ丁寧に生み出していきたいと思っています。切り絵を通して、この街の美しさや魅力を、一人でも多くの人に届けていきます。





ここでしか読めないリレーコラム⑰

北九州のキラリ人からの1,000文字。



前田祇園山笠保存会会長
上田 隆雄 さん

八幡東区祇園町生まれ、66歳。2025年3月まで八幡前田郵便局長。現在は前田第一自治区会長、仲宿八幡宮常任総代、前田祇園山笠保存会会長等を務め、人とのつながりを大切に、地域活性化と伝統文化継承に尽力している。

今年の夏も血が騒ぐ！ ー前田祇園山笠、受け継いで800年ー

800年の伝統を守る

八幡東区前田地区に伝わる前田祇園山笠は、仲宿八幡宮の祭礼に奉仕する氏子の山笠行事です。その起こりは室町時代初期。この地方を支配した麻生氏は、花尾山麓の広河原（のちの祇園原）に八束髪（やつかひげ）神社を建立しました。領内の除疫と豊穣を祈願するために、京都の八坂神社よりスサノオノミコトを勧請し、祇園会を行ったことが由来といわれています。前田祇園山笠は地域の人々の祈りとともに受け継がれ、北九州市の「無形民俗文化財」にも指定される、かけがえのない伝統行事となっています。

山笠は変遷しながら現在の姿へと

山笠の形態は時代とともに変化し、現在では笹山笠と人形飾山笠が受け継がれています。6月下旬のお潮井取り神事を皮切りに、笹山笠による巡行、その後、人形飾山笠へと衣替えし、祇園祭の3日間にわたり宮入や地域巡行、競演会などが繰り広げられます。一番山笠、二番山笠、本宮山笠の三基が仲宿八幡宮から御神輿とともにお旅所（旧八束髪神社跡地）へと進み、地域を巡行する姿は、まさに前田の誇りです。

今年の前田祇園祭

今年は6月28日のお潮井取り神事から始まり、旗笹山笠巡行（7月12日）、前日祭（18日）、当日祭（19日）、後日祭（20日）と続きます。御神幸は当日祭に催行され、御神輿は仲宿八幡宮を出発し、氏子地域を巡りながらお旅所へと向かいます。山笠はこれに供奉し、道中の安全と地域の安寧を祈念しながら巡行します。

お旅所到着後は神事が執り行われ、その後、御神輿と山笠はそれぞれの役割のもと、地域へと戻り、巡行を続けます。後日祭は「まえだぎおん山笠通り」で太鼓競演会や山笠競演会が開催され、祭りは最高潮を迎えます。

次世代へつなぐ山笠の心

この伝統を次世代へつなぐために、花尾小学校の児童による人形制作や、山笠太鼓の継承といった取り組みも進められています。長い歴史と地域の絆に支えられてきた前田祇園山笠を、これからも守り伝えながら、多くの方々にその魅力を感じていただければ幸いです。今年も熱い夏をご一緒に楽しみましょう。何卒、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。





ここでしか読めないリレーコラム⑯

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。



漫画家 山田 圭子 さん



北九州市門司区出身の漫画家。1987年のデビュー以来、少女漫画から歴史、医療など、幅広いテーマを手がける。1型糖尿病の子どもたちを主人公にした『げんきの森日記』は英語、中国語、韓国語、仏語などに翻訳されている。

漫画がだれかの力になれたら ～1型糖尿病の子どもたちを描いた『げんきの森日記』～

漫画家への道

幼い頃から本の挿絵や漫画の模写をするのが大好きでした。中学生の時に初めて見た『機動戦士ガンダム』に衝撃を受けました。その頃から、人間の葛藤を真正面から描いた壮大な作品が漫画やアニメで数多く生まれており、その世界観に引き込まれました。「将来、漫画家になりたい」という憧れも強くなりました。

高校卒業後、アルバイトをしながら独学で漫画を描き続け、21歳の作品が、ある賞を受賞。それがデビューのきっかけです。

1型糖尿病の子どもが主人公。『げんきの森日記』を描くことになった理由

コロナで社会も私自身も閉塞感に包まれていた2020年頃、『げんきの森日記』が生まれる制作依頼が舞い込みました。認定特定非営利活動法人日本IDDMネットワークを通じ、ある医療メーカーからの「1型糖尿病の子どもたちのサマーキャンプのことを描いてほしい」というもので、コロナで中止を余儀なくされたキャンプの本来の意義や、キャンプで学び、成長する子どもたちの姿を伝えてほしいという依頼でした。

1型糖尿病の実姉のこと

私の姉は小学5年生の時に1型糖尿病を発症しています。長年、姉がインスリン注射を打つ姿や、体調がすぐれない様子を見てきました。しかし、あらためて姉に取材すると、血糖管理の大変さや低血糖への恐怖、誰にも見せずに抱えてきた不安を聞き「知っているつもりだったのに、まるで知らなかった」と愕然としました。

取材を重ねる中で、今まで以上に患者さんが直面する偏見や孤独、それを支える家族や医療者の存在を知り、この病気のことをもっと社会に伝える必要があると痛感したのです。

物語を、未来へ

漫画は多くの反響を呼び、翻訳されて海外でも読まれています。『げんきの森日記』の制作は一旦終了しましたが、現在、映画化のために奔走しています。

この物語が患者さんやご家族の心を少しでも軽くし、前を向く力になれたらと願います。ぜひ、応援していただけましたら幸いです。



「人権市民講座～1型糖尿病を知ってほしい！～」で講演する製鉄記念八幡病院糖尿病センター長・糖尿病内科主任部長 中村宇大医師と山田先生

ここでしか読めないリレーコラム⑮

北九州のキラリ人からの1,000文字。



染織家

うちやま けいた
内山 啓大 さん

1983年、北九州市八幡東区生まれ。小倉織に魅せられ、築城則子氏に師事。2025年、「第72回日本伝統工芸展」で日本工芸会新人賞を受賞。草木染めによる深みのある色と、独自の縞構成が特徴。

縞に魅せられて ― 小倉織・内山啓大さんの挑戦

日本工芸会新人賞に輝く

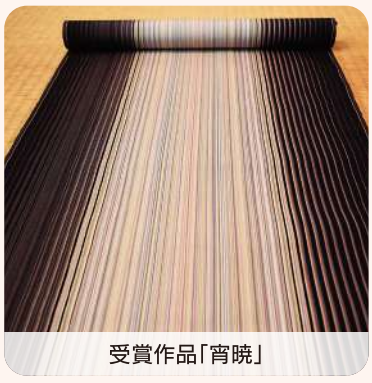
八幡東区の静かな山あいの住宅街に、染織家内山啓大さんの工房はあります。小倉織の継承者として草木で糸を染め、日々、機に向かう内山さんは2025年8月、「第72回日本伝統工芸展」で日本工芸会新人賞を受賞しました。新聞やテレビの取材が立て込む中、工房を訪ねました。

高校生の時に読んだ小説がきっかけで、「ものづくりで生きたい」と、京都で染織を学んだ後に帰郷。偶然出会った小倉織の美しい縞に魅せられ、第一人者である築城則子さんの下で修行。小倉織の魅力を「縞は格好よくて美しいです。木綿ならではの落ち着いた光沢には、光を反射する絹と違い、光を内側から発し、深みがあります。その魅力を生かした格好いい小倉織を、ぜひ多くの方に気軽に身に着けていただきたいです」と話します。

まだ誰も見たことのない縞を織りたい

受賞作品には「宵暁」と名付けました。夜明け前の闇と、昇る陽の光を表現するため、黒を基調にグレーだけでも10色以上を重ね、光源を表現するために生成や白を多く使いました。縞の線を細い点線に見えるように織るなど、細部まで創意工夫を凝らした作品です。「今回の受賞はとても光栄なことで、大きな励みになりました。でも、まだまだです。きっと一生、満足のいく作品はできないと思いますが、それがまた面白いところです」と笑顔をのぞかせます。

注目の染織家の今後の目標は「まだ誰も見たことがないような縞を作りたい」。内山さんの織りなす手が、静かに確かに、新たな縞を紡ぎ出しています。



受賞作品「宵暁」



内山さんの受賞作品が見られる

「第72回日本伝統工芸展」巡回展のご案内

2026年2月4日(水)ー2月9日(月) 福岡三越にて

陶芸、漆芸、金工、木竹工など7部門にわたる入選作品も展示されています。
詳しくは同展のホームページなどをご覧ください。

ここでしか読めないリレーコラム⑭

北九州のキラリ人からの1,000文字。



株式会社安川電機
総務・リスクマネジメント本部
総務部長
なむら ともみ
名村 知美 さん

東京生まれ、神奈川育ち。新卒で日本銀行に入社、その後、外資系金融機関に転職するも夫の転勤のため退職。
ドイツ、福岡に転居し、個人事務所、ベンチャー企業などを経験し、2015年安川電機「人材多様性推進室」副室長に着任。2024年3月から現職。

一朝一夕にはいかない道を行く！

想像以上に「男性中心」だった

夫の転勤で福岡に来て、2015年女性活躍推進法が制定された年に安川電機に入社し、人材多様性（ダイバーシティ）を推進する部署に配属されました。弊社はサーボモータ、インバータ、産業用ロボット等を製造・販売するメーカーで、男性社員が圧倒的に多く、女性管理職は非常に少ない状況でした。

それまで金融機関や外資系企業といった、わりと多くの女性が在籍し、自由な社風で自主性を尊重する職場が多かったので、想像以上に「男性中心」の社会にたびたびカルチャーショックを受けました。一方で「やりがいしかない！」と、自らを奮い立たせたことを思い出します…（笑）。

弊社の女性管理職比率は2.5％と、まだ高いとはいえない状態ですが、努力を重ねています。ただ、数合わせで女性登用を行っても意味はありません。誰もが経験できるチャンスに恵まれ、挑戦しながらキャリアを築く、その先に真の女性活躍があります。私ができることは、彼らの背中を押して、応援し続けることです。

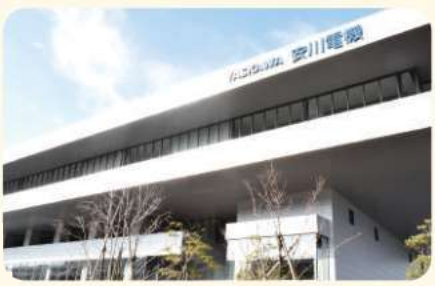
ドイツの「ガールズデー」を取り入れて

入社して10年間続けている活動に、「ガールズデー」というイベントがあります。ドイツ発祥の取り組みで、「理系の仕事は男子のもの」という先入観を少しでも和らげたいという試みで、弊社でも、女子中学生を対象に開催しています。女性エンジニアとの交流や実習を通して、ものづくりに興味を持ってもらう体験プログラムです。近い将来、「ガールズデーに参加したことがきっかけになりました！」と話す新入社員の登場を心待ちにしています。

背中を押す存在でありたい

今、社会全体が「人手不足」に悩んでいます。性別、国籍、年代、いろんな多様性を受け入れて、いろんな人が活躍できる組織にしていかなければ立ちゆかなくなります。

2024年3月、現職に就きました。100年以上の弊社の歴史の中で、事務系の女性で部長職は初かもしれません。一朝一夕には難しいかもしれませんが、次の誰かがもっと登りやすく歩けるように、私にできることを語り続け、行い続けていきたいと思っています。



ここでしか読めないリレーコラム⑬

北九州のキラリ人からの1,000文字。



落語家
橘家 文太（たちばなや ぶんた）さん

北九州市出身の落語家。2014年に三代目橘家文蔵に入門し、2020年に二ツ目昇進。北九州を拠点に活動し、移動式の高座「落語car」で地域に笑いを届けている。2021年には西日本文化賞奨励賞を受賞。

寄席のない町に落語を！ −北九州から真打を目指す−

◇ヤンキーだった自分が落語家に！

落語家の橘家文太と申します。2014年に文蔵師匠に弟子入りし、2020年に二ツ目に上がったタイミングで、東京から故郷の北九州市に拠点を移しました。東京、大阪以外の土地で活動しているのは、1,000人いる落語家の中でも私一人です。

若い頃はかなりやんちゃで（笑）、「これまでの自分を断ち切ろう、人生を変えちゃろう」と27歳で上京。しばらくはお金を貯める目的でキャバクラで働いていました。ある日、ふらっと入った寄席で師匠の落語を聞きました。座布団の上で一人の人間が江戸時代の噺をして、それにお客さんが爆笑している光景に、「こんな世界があるんだ」と心を動かされました。

数日後、家の近所を歩いていると、偶然通りかかった小劇場の立て看板に「文蔵師匠独演会」とあるではないですか！導かれるように入り、やっぱり師匠も落語もおもしろい！と思って、弟子入りを志願しました。

◇落語家になるための修行

朝は師匠の家で掃除、炊事、洗濯など家事全般を行います。昼間は寄席の裏方として働きます。高座にあがる数百人の落語家一人ひとりの「癖」を覚えるのが大変です。お茶の温度、濃さ、着物の着方やたたみ方まで、好みがバラバラです。もちろん性格もバラバラ。それをたたきこむのも修業のうちです。夜は師匠のかばん持ちでいろいろな寄席に付いていきます。1日も休みのない5年半でしたが、すべてが「異世界」で、今思えば面白かったですね。

◇師匠のすすめで北九州へ

二ツ目に上がった時、「東京に残ってもいいが、北九州で落語を広めるのもいいんじゃないか」と師匠に言われ、故郷に戻りました。東京は寄席や落語会の会場が何百もありますが、北九州は落語を聞いたことすらない人がほとんどです。最初は居酒屋や飲食店で話をさせてもらいました。おかげさまで今は、いろいろなところに呼んでいただいています。

◇目指すは、地方在住での真打昇進！

人生って、ほんとにおもしろいです。まさか自分が落語家になっているなんて、今でも不思議な気分になることがあります。今の目標はただ一つ。地方を拠点にしながら真打昇進することです！それは、歴史上初のことで、ぜひ成し遂げたいと思っています。

笑うことは健康にもいいです。しわも伸びますし、人生に必要な時間と思います。一人でも多くの北九州の方に落語を届けたいです！皆さん、ぜひ遊びに来てください！



北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

八幡東区自治総連合会 会長 畠中（はたなか） 聡之（やすゆき）さん

八幡東区中央町で生まれ育ち、大学卒業後に就職したのは、冠婚葬祭関連の会社でした。当時、急成長産業でしたから、非常に忙しく、2年間、一日も休まずに働き続けたこともあります。沖縄、金沢、北海道などで、新規事業の立ち上げを任されたり、ホテルの総支配人なども経験しました。おかげで仕事で培ったプロジェクト管理のスキルやイベントの企画、人とのネットワークづくりなどは、地域活動を行う上で大いに役立っています。

60歳を過ぎて、「地域に何かしら貢献したい」という気持ちが強くなり、地元に戻る決心をしました。私の父は中央町で行政書士をしながら、自治会活動にも長く携わり、町の人の相談に乗っていました。その影響もあったのでしょうか、次第に私も地域の責任ある役割をいただくようになり、現在に至っています。



忘れられないのは、2014年に開催した「全国餃子サミットin北九州」です。〝鉄の町〟だけでなく、〝食の町〟という八幡の新たな魅力を打ち出そうと、八幡餃子をテーマにしたイベントを企画。全国から40店舗以上が集まり、16万人もの来場者を迎えることができました。近い将来、中央区商店街、大谷球場などを活用したプロジェクトが実現できればと模索しているところです。

八幡東区の皆さんは、何をするにも協力的で発想力、行動力に富んでいて「八幡を盛り上げよう」という熱意のある方が多いです。団結力も突出していますので、いろいろなプロジェクトを成し遂げてこられたと思います。

私も70代後半になりましたが、毎日、いろいろな人から電話がかかってきて、相談を受けたり、相談したりの連続です。とにかく、ぼーっとする暇がまるでありません（笑）。それが私の健康法かもしれないですね。大変なことも多いのですが、「どんな状況でも前向きに！」を心がけています。

若い世代へのバトンタッチも視野に入れながら、地域のお役に立てるように、もう少しがんばります。皆さんと共に八幡東区がよりよい方向に進むように、力を尽くしていきます。皆さん、一緒に八幡を盛り上げましょう。



今回のキラリ人

畠中 聡之（はたなか やすゆき）さん

地域のまちづくりに欠かせない中心人物。八幡東区自治総連合会会長、中央第一自治区会会長、八幡東区社会福祉協議会委員長、八幡大谷まちづくり協議会会長、市環境衛生協会連合会会長、八幡ぎょうざ協議会顧問など、多方面にわたる役をこなす。

北九州のキラリ人からの1,000文字。

溝上酒造株式会社　代表取締役／8代目杜氏 溝上 智彦さん

ピンチを乗り越え、17年ぶりに金賞受賞！

17年ぶりの快挙！

清酒のコンテストはさまざまありますが、毎年5月に行われる「全国新酒鑑評会」は日本最大です。昨年「天心 大吟醸 雫」が17年ぶりに金賞を受賞し、コロナで長く苦しい状況が続く中で、久しぶりにうれしいニュースになりました。

当社は地元の酒米、皿倉山の伏流水にこだわっています。毎年、細かな改良をほどこし、「前年よりも丁寧で清潔な作業」を心がけた結果が受賞につながったと思います。従業員だけでなく、お世話になっている酒類卸、飲食店、地元の方など多くの方からお祝いの言葉をいただき、一層、心に沁みた受賞でした。



出口の見えないコロナ。だからこそ、新しいことに挑戦

コロナ禍で粛々と酒造りは続けていましたが、緊急事態宣言で酒類提供禁止令が出て、経営は困難を極めました。「売上、出荷ともにゼロ」は180年の歴史で初めてのことでした。

従来通りのことをやっても生き残れません。ここ数年は新商品の開発、従業員のスキルアップ、キャッシュレス化など新しいことにチャレンジしました。おかげさまで大好評の新商品も誕生しましたが、まだまだコロナ前の売り上げには戻りません。今なお厳しい状況ですが、頑張るしかないです！



これからの酒造りにかける思い

金賞をいただいても、自己採点では70点くらいでしょうか。満足したら、そこで終わりですから、これからも理想の酒を追い求めていきます。

一つ気がかりなのは、最近の異常気象です。猛暑は酒米の生育にもろに影響を及ぼします。天候をふくめ、さまざまな変化に、我々造り手も柔軟に対応しながら、皆さまに愛される酒を造っていきます。皆さん、日本酒を飲みましょう！よろしくお願いいたします。



今回のキラリ人
溝上 智彦（みぞかみ ともひこ）

1844年（弘化元年）創業。代表銘柄「天心」は地元だけでなく、全国の地酒ファンに愛されている。2024年5月、「天心 大吟醸 雫」が全国新酒鑑評会で金賞受賞。

1996年から8代目杜氏を務める溝上さんだが、実は下戸。利き酒以外で酒は嗜まないが酒の味は人一倍わかる。

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

北九州市立八幡図書館　館長 富原 まさ江さん

本をつなぐ。司書&翻訳者として

変化する図書館

皆さん、図書館にどのようなイメージをお持ちでしょうか？シーンとした静寂の中、読書や調べ物をする場所。そんな感じでしょうか。実は最近、図書館は「人が集う場所」に変化しています。イベントや地域の情報発信、生涯学習のサポートなどを積極的に行っていて、中には婚活イベントやヘアアレンジ・メイク講座といった面白い取り組みを行う図書館もあります。これまで足を運んだことがない方にも、気軽に来ていただく創意工夫を凝らしているんです。

大切な1冊を見つけてほしい

当館もいろいろなイベントを催しています。以前、直木賞作家の東山彰良さんのトークショーを行ったとき、参加者から「本や活字離れについてどう思いますか？」と質問がありました。東山さんは「出逢うべき1冊があるのに、出逢わないのは残念だと思います」と答えられ、その言葉がずっと心に残っています。私にも、悩んだときに必ず読む1冊があります。

当館には約19万冊の蔵書があり、児童書コーナーも充実しています。ぜひ、幅広い年代の皆さんに遊びに来ていただき、それぞれの大切な1冊を探していただきたいです。

司書と翻訳者と2つの「顔」

小学生の頃から本が大好きで、毎月、母が買ってくれる「世界名作全集」を楽しみに読んでいました。中学生になると、海外ドラマや英語の曲を日本語に訳すことに熱中して、大学も米英学科に進みました。夢は翻訳者でした。

仕事をしながら翻訳者養成の通信講座で学び、翻訳のオーディションを受け続けていました。あるとき、世界的歌手のマドンナの語録集を担当する機会が訪れました。その翻訳を評価していただき、今では出版社から直接、依頼を受けています。これまでに出版された訳書は70冊ほどになります。

同じ英語でも文化や国によって訳し方が違ったり、最適な日本語を選ぶのに頭を抱えたり。苦労も多いですが、面白い原作を、私以外の読者に早く読んでいただきたいので、それが原動力になっています。ちなみに英語の読み書きはできますが、英会話は日常会話程度…です（笑）。

子供の頃から30歳くらいまで毎日、活字づけでした。その積み重ねがあったから、司書と翻訳者の今があると思います。2足のわらじ生活は続きますが、どちらも私にとって切っても切り離せない大事なものです。これからも図書館の魅力をお伝えしながら、長く読み継がれる作品を訳していきたいと思います。

ぜひ、八幡図書館にお越しください。お待ちしています。



今回のキラリ人

富原 まさ江（とみはら まさえ）

八幡図書館館長。英日出版翻訳者としてこれまで70冊以上の訳書がある。主なものは「料理からたどるアガサ・クリスティー」「世界を騙した女詐欺師たち」「レジェンド・オブ・マッドマックス」など。

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

八幡中央区商店街　理事長 坂本 洋二さん

商店街に新たな風を！

このたび八幡中央区商店街の理事長を拝命しました。中央町で生まれ育った私は、この商店街にはたくさんの思い出が詰まっています。しかし、今後も閉店を控える店舗があり、シャッター街化になんとか歯止めをかけたいところです。

理事長として対応しなければいけない喫緊の課題は二つです。一つは待ったなしの空き店舗対策。そのためには新規店舗の誘致、家賃交渉など積極的に取り組んでいかなければいけません。

全国的にも成功している丸亀商店街（香川県）、させぼ四ヶ町商店街（長崎県佐世保市）など視察に行きましたが、どこも活気があって驚くほど栄えています。真似できる点はどんどん取り入れていきたいです。

また、商店街の活性化には、若者のチカラや視点が必要と思っています。近隣の大学生にどんな商店街なら魅力的か、どういうお店があったら来たいかなど、まず調査を始めます。ＳＮＳを活用した地域コミュニティとの密接な連携も取り組んでいきます。

八幡愛が強い仲間たちと

もう一つはイベントの見直しです。１００円商店街はじめ様々なイベントを開催していますが、最近はマンネリ化が否めません。集客力も弱くなりがちで、今までとは違ったアプローチが求められているのでしょう。夜市、ビアガーデン、子供が楽しめるイベントなど「八幡中央区商店街に行けば楽しいことがある」という仕掛けを模索中です。

以前、製鉄記念八幡病院の土橋理事長と「子ども食堂があるなら、〝高齢者食堂〟があってもいい！」というお話をしたことがあります。とてもステキなアイデアで高齢者の健康長寿や心のよりどころになると思います。これからも、せいてつ病院さんとコラボをお願いします！

商店街活性化の道は険しく、一朝一夕に課題を解決するのは難しいですが、おかげさまで多くの仲間たちがいます。八幡の人は義理人情に熱く、地元愛が強く、町にプライドを持っている人ばかりです。そんな仲間たちと一緒に、商店街の再生に取り組んでいきます！

「坂本に任せても、何も変わらんかったなあ」と言われないように、有言実行あるのみです。重責ですが、精一杯、務めますので地域の皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。いつまでもこの地を守るために、勇気をふりしぼって前進していきます！



今回のキラリ人
坂本 洋二（さかもと ようじ）
本業は配管・製缶業の代表取締役で、夜は八幡中央区商店街にある「八幡ｉｚａｋａｙａ１９０１」で厨房や接客に立つ。八幡ぎょうざ協議会会長、中央町連絡協議会・結（ＹＵＩ）副会長、２０２４年４月から同商店街の理事長として、八幡の活性化に挑む若きリーダー。

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

千草ホテル　営業企画マネージャー 小野山 美緒さん

私は、乳がんサバイバーだ。

20代、思いつきと惰性で職に就き、博多や東京で過ごしたあと結婚もしてみたが長くは続かなかった。プラプラしていた30代半ば、甲状腺を患い身体に不自由を感じてやっと「腰を据えて地元で働こう」と千草ホテルに再就職。40代、仕事に遊びにと絶好調の真っ只中、48歳で乳がんによる左乳房全摘、翌年乳房再建、さらにその翌年に子宮筋腫でも全摘術を経験した。幸運にも検診のおかげで超早期発見！全て〝切って終わり〟、投薬＋経過観察中の身ではあるが、50歳でようやく女性機能との闘いが終了した。…で、今は？ハイご覧のとおり、日々ゴキゲンに暮らしている😊

40代は忙しい。誰もが家庭に仕事に子育てにと奔走する時期だろう。私には子供がいない分、仕事に全力投球だった。千草ホテルで仕事に没頭するということは、必然的に地域の方々との交流が濃くなるわけで、「千草になんか面白いのがおるらしい」とアチコチでウワサしていただき、たくさんの八幡の方々と出会い＆飲み＆語り明かすことが、私の活力の源にもなった。

八幡には、魂がある。

官営八幡製鐵所を目指し全国からココにやって来て、製鐵所と共に生き、暮らし、町を形成し、地域の文化を育んできた。八幡という土地には、自分達が町を作ってきたという誇りと、製鐵所が日本を支えてきたというプライドが満ち溢れている。皆の八幡愛が結実し、製鐵所関連施設がユネスコ世界遺産認定を受けた、そのお祝いを…。八幡といえば鉄だ、鉄そのままをお土産にしよう！そうして鉄の味のする金平糖「鐵平糖（てっぺいとう）」という…奇妙で微妙、だが一度食べると忘れられない名（迷）物土産が誕生したというわけだ😂

人生100年時代だという。

医療の進歩と便利な道具は、人間が長く快適に暮らせる世の中を作ってくれた。だが、当たり前のことだが、明るく楽しく元気良く暮らし続けるためには、日々自分をゴキゲンでいさせなければならない。自分の身体や心の声に耳を傾け、身近な〝頼っていい誰か〟にサポートをお願いし、色んな方からの助けを得ながら自分自身を丁寧にケアすることで、人生は上々になっていくものだと私は思う。

八幡は、本当に良いマチだ。

遊び甲斐と学び甲斐と働き甲斐でいっぱいだ。

「マチと、マチの人のために、尽くせ」

千草の会長の言葉を胸に、今日も私は、笑顔のいらっしゃいませと、心からのありがとうを頑張るのだ。

ココからは、皿倉山のてっぺんが本当によく見える。顔を上げ、皆で八幡を眺めよう。



今回のキラリ人

小野山 美緒（おのやま みお）

八幡への愛があふれる、まちづくりリーダーの一人。地域のだれもが「八幡の仕掛け人」と口をそろえる。「鐵平糖」の発案者で、本業の千草ホテルの企画のほか、八幡中央区商店街や八幡東全体での企画にも情熱を傾ける。中央町連絡協議会・結（ＹＵＩ）副会長、八幡ぎょうざ協議会事務局長など。

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

NPO法人わくわーく 理事長 小橋 祐子さん

わくわーくの3つの柱

わくわーくは九州国際大近くの「ココクル平野」を拠点に様々な活動を行っています。活動は大きく3つの柱があります。1つは障がいを持つ方とその家族の就労・生活支援を行う「福祉サービス事業所ＢＯＣＣＨＩ（ボッチ）」です。現在、発達障害や精神障害をもつ約15人の利用者さんが通い、お菓子や小物などをつくって販売、収入を得ています。2つめは「多世代交流スペースくるくる」。地域食堂や竹チェロ教室、演奏会などいろいろな企画を行い、障がいのあるなしに関わらず、お子さんから高齢者まで、いつでもどなたでも集える場となっています。3つめの「Ｂｅ Ｈａｐｐｙ プロジェクト」は、障がいのある方が地域とコラボして「コト」や「モノ」を生み出す活動。代表的なものに、企業や自治体などを回って古紙回収し、アップサイクル品の加工を行う「ＫＡＭＩＫＵＲＵプロジェクト」があり、環境に配慮した社会的意義が大きいと、「２０２１北九州ＳＤＧｓ未来都市アワード」で大賞をいただきました。



内閣府より活動を表彰

わくわーくを立ち上げた当初は、こんなに人の輪が広がり、新しい活動が生まれるとは想像もつきませんでした。私は根っからの「でべそ」（笑）。いろいろな所に顔を出していると、新しいプロジェクトに繋がる出会いに恵まれるんです。

おかげさまで２０２２年、「バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者／内閣府特命担当大臣表彰」で優良賞をいただき、これまでの活動が評価されたとみんなで喜びました。



わくわくする出会いが見つかります

わくわーくには一人暮らしの高齢者、シングルマザー、近くに知り合いがいない方、何かしらお困りごとを抱える方など、多世代・多様な方が集います。皆さんが「ここに来て楽しかった」と思えたり、どなたにとっても「何かが見つかる場所」になればいいなと思います。

皆さん、お気軽にお立ち寄りください。わくわくする出会いがあるかもしれません。あなたはひとりＢＯＣＣＨＩではありません!!



今回のキラリ人

小橋 祐子（こばし ゆうこ）

ＮＰＯ法人わくわーく（ココクル平野）

北九州市八幡東区平野1丁目3番2号

ＴＥＬ：093-671-1221

北九州市八幡生まれ。精神障がいを持つ方を対象にした小規模作業所に17年間勤務した後、「ＮＰＯ法人わくわーく」を立ち上げる。地域を盛り上げる事業にも積極的に関わる中で、22年度の「バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者」の内閣府特命担当大臣表彰（優良賞）を受けるなど、多岐にわたる活動が認められている。

北九州のキラリ人からの1,000文字。

千草ホテル 女将 小嶋 美恵子さん

八幡の老舗ホテルは来年110周年

おかげさまで当ホテルは来年、創業110周年を迎えます。1914(大正3)年に創業者の勝太郎が現・中央町に開業した料亭千草は、官営八幡製鐵所の御用達として大いに賑わったようです。その後、勝太郎の次男・守が千草ホテルを開業しましたが、昭和20年の八幡大空襲で両施設とも全焼し、翌年、ホテルは現在地(西本町)に移転しました。



私が女将になりたての昭和40年代後半は、大宴会場が4つございました。ほかに大きな会場がなかった時代ですから、結婚式だけでひと月80組、お受けすることもありました。いつの時代も製鉄所のご関係者や地域の皆様に、ハレの宴やご家庭の節目の行事でご利用いただいております。

主人の一碩(現会長・守長男)は昔から「ホテルは地域が活性化して、にぎやかなおかげで成り立つ」と申しております。スペースワールドができた時は、何か私どももお役に立てないかと、鍋を土星に見立てた「スペース鍋」や「宇宙会席」など料理長と工夫してお出ししたり、町おこしの一環で国際鉄鋼彫刻展(1987年)の開催もお手伝いしました。

こんなに静かな千草は、女将になって初めてでした

この数年のコロナは、言葉では言い表せないほど大変でした。「ここでボシャるわけにはいかない!」と亀のように首をすくめて堪えました(笑)。こんなに当ホテルが寂しかったのは、お嫁に来て初めてのことと思います。ですが、良いこともありました。旅行支援制度で遠方にお住まいの方や海外のお客様にも足を運んでいただく機会に恵まれ、タイのお客様とは、学生時代に留学生から習い覚えたタイの民謡・ロイカトンを合唱するなど、思いがけず楽しい時間をいただきました。

私は八幡の出身ではございませんが、この町はいろいろな土地から来られた方で成り立ってきた歴史があります。そのためでしょうか、皆さん、心広く落ち着いた穏やかな方が多く、それも八幡の特徴かと思います。

「女将、まだ出てるの?」と仰られるかもしれませんが(笑)、これからも地域への恩返しと、生涯現役でお客様をお迎えしてまいりたいと思います。どうぞ皆様のお越しをお待ちしております。



今回のキラリ人
小嶋 美恵子(こじま みえこ)

昭和21年静岡生まれ。父の転勤に伴い岐阜・大阪を経て高校2年時(昭和37年)北九州市へ。小倉高校~九州大学卒業後、昭和44年結婚を機に千草ホテルへ。お客様の大切な記念日に寄り添うアニバーサリーホテルとして、これからも歩み続けてまいります。

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

豊山八幡神社 第72代宮司 波多野 隆英さん

「やはた」地名の発祥

みなさんは、八幡の地名の由来をご存じですか？この話をするためには1，800年も遡ってお話をしなくてはなりません。約1，800年前、第十四代神功皇后はこの八幡の地を訪れ、当社が鎮座している山に「天下が豊かになること」を願い弓矢を納め、『豊山（ゆたかやま）』と名付けました。それから時代は流れ、推古天皇の御代である西暦623年、御神託により宇佐神宮より八幡神をこの地に勧請し、豊山八幡神社が創建となります。



尾倉村より村が段々と広がり、小倉（おぐら※後に尾倉に改称）、六ケ村（尾倉、前田、大蔵、枝光、鳥旗、中原）の総鎮守として当社は隆盛を極めました。各村には鎮守神社が必要となり、当社ご分霊をそれぞれの氏神様として遷し、枝光には枝光八幡宮、前田には仲宿八幡宮、大蔵には乳山八幡神社など、各村に当社をルーツとする八幡神社が創建されていきました。

「製鉄記念尾大光病院」だったかもしれない?!

1889年（明治22年）、市町村制実施により尾倉、大蔵、枝光の三村合併の折、地名を定める協議がなされ、各村の頭文字をとって『尾大光（びだいこう）』という名前で一旦決まりかけたそうです。決まっていれば、製鉄記念尾大光病院となっていたかもしれません（笑）。

しかし、あまりにもしっくりこない地名は再協議となり、三村それぞれの氏神様が豊山八幡神社よりはじまっていたこともあり、八幡という字を取って八幡村と決まりました。これが、当社が『やはた』地名の発祥の地と言われる所以であります。

1923年（大正12年）、八幡東西区では社格制度において最初に『村社』から『県社』に昇格され、1930年（昭和5年）、八幡製鉄所と共に八幡の繁栄した時代に、氏子崇敬者の浄財により総檜造りの現社殿が竣工し、八幡総鎮守の宮として現在も多くの崇敬を集めております。

創建1，400年にあたり

本年、当社は創建1，400年を迎えます。地域社会の発展、崇敬者各位の平安・安寧を信仰として、連綿と受け継がれてまいりました。次の時代にも『つなぐ』ことを見据え、佳き年を奉祝すると共に『（やはた地名発祥の地）記念碑』や『鉄の大しめ縄奉製』など諸事業を地域の皆さまと共に進めてまいります。ぜひ、足を運んでみてください。



今回のキラリ人
波多野 隆英（はたの たかひで）
1985年生まれ。國學院大學神道文化学部にて神社の礎を学ぶ。卒業後、豊山八幡神社の禰宜として神職の道を歩む。2021年4月、父より引き継ぎ豊山八幡神社はじめ全十社の宮司を拝命。福岡県神道青年会事務局長、副都心開発推進会議副幹事長、中央町まちづくりプラン理事、八幡法人会青年部、八幡ぎょうざ協議会、尾倉まちづくり協議会など地域活動にも幅広く従事している。

北九州のキラリ人からの1,000文字。

北九州市漫画ミュージアム館長 田中 時彦さん



北九州ゆかりの漫画家は１００名超!!

東京の若者に「北九州と言えば」と質問すると「漫画ミュージアムがあるところ」と答が返ってくるようになった。私が勤務する北九州市漫画ミュージアムは昨年開館10周年を迎え、ようやく国内外からも認知されて来た。当館は国内では珍しい公立の総合漫画博物館です。「総合って何?」と思われるでしょうね。漫画施設の多くは地元出身作家にスポットを当て、個人記念館や文化施設内にコーナーを作り、その業績を紹介するところが多い。

しかし、北九州市はゆかり漫画家が１００名以上もいて、地方都市としては異例に多い数だ。そのため個人記念館という訳にはいかない。市はいち早くこの点に着目して、漫画を文化財産と捉えて作家紹介だけではなく、原画や資料の収集保存のほか、漫画を活かす事業に着手した。

初代名誉館長は故・松本零士さん

「漫画の街・北九州」宣言をし、街の活性化のため地域振興や産業創出まで踏み込んだ漫画文化発信基地「北九州市漫画ミュージアム」を２０１２年にオープンさせた。名誉館長には地元出身の漫画家・松本零士先生にお願いした。また館長候補には地元企業を定年退職した私に白羽の矢が立った。

実は館長選考には漫画の有識者や漫画作成に加え、サラリーマン経験者を探していたようだ。多くの候補者がピックアップされる中で私の名前が浮上した。私は長年サラリーマン生活をしながら少年漫画誌に漫画を描き、様々な広報誌やポスターに漫画やイラスト等を提供してきた。しかし、博物館の運営は全くの素人で知識も経験もない。一度はお断りしたものの当時の局長に説得され、初代の館長を引き受けた。ここから新米館長の奮闘が始まった。漫画家が博物館館長というケースも珍しいようだ。

「漫画の街・北九州」の発信基地として

お陰様で公立の総合漫画博物館という事で国内外からの信頼度も高く、今では漫画、アニメブームに乗って国内ばかりでなく海外との交流事業も増えてきた。定期的に開催する漫画教室は大人気でなかなか予約が取れないほど。私自身も様々なシーンで漫画の指導やワークショップ等に出講する機会も増え、第二の人生を謳歌している。皆さんもお時間があれば自由に７万冊の漫画本が読めて、生原画を見て楽しめる当館に是非遊びに来てほしいと願っています。(尚、当館開館に多大なご尽力を頂いた松本零士先生が本年２月にご急逝されました。この場をお借りして心よりご冥福をお祈り申し上げます。)





今回のキラリ人 田中 時彦さん(たなか ときひこ)

小倉北区生まれ。１９７９年週刊少年マガジン増刊号で漫画家デビュー。地元企業でサラリーマン勤務のかたわら漫画家としても活躍。退職後の２０１２年北九州市漫画ミュージアム館長就任。あぜのまち絵本美術館設立(福津市)など地域での街づくり活動などにも精力的。童画家、イラストレーター、漫画家として新聞・雑誌に寄稿しながら全国各地で展示会も開催。

北九州市漫画ミュージアム
北九州市小倉北区浅野二丁目14-5 あるあるCity５階・６階
【営】11:00～19:00 ※入館は閉館の30分前まで
【休】毎週火曜日(休日の場合はその翌日)・年末年始など
TEL:093-512-5077

北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。

小倉昭和館 館主 **樋口智巳**さん



館内には著名人のサインがずらりと飾ってあった

映画の街・北九州のシンボル的存在だった小倉昭和館が昨年8月10日、旦過市場で起きた2度目の火災で全焼した。3代目館主樋口智巳さんは「さすがに今回は閉館を覚悟しました」と振り返る。悩み続けた数ヶ月。83年の歴史を紡ぐ、館主が選んだ答えは「再建」。その想いを伺った。



火災前の小倉昭和館（2022年7月）

火災後、メディア取材に気丈に対応された姿が印象に残っています。

事後処理やご挨拶回りなど、気を張った状態がずっと続いているのだと思います。まだ悲しみにくれることはできず、声を上げて泣いたことはありません。ただ一度、私をふくめた歴代館主が毎朝手を合わせていた神棚が焼けて、神様にいったん天に戻っていただく神事を行ったときは、これまでずっと守っていただいたのに、と申し訳なくて涙があふれました。

昭和館のファンだけでなく、リリー・フランキーさんなど多くの著名人のサポートも大きいのでは。

本当にありがたいです。リリーさんは私が落ち込まないように独特のジョークで笑わせてくださったり、火災直後からずっと支えてくださっています。仲代達矢さんはサインが燃えたお詫びを伝えると「僕のサインぐらい何枚でも書きますよ」と励ましていただきました。高倉健さん直筆のお手紙も焼け、健さんの命日（11月10日）に墓前にお詫びに伺いました。亡くなった方からいただいた宝物はもう返ってきません…。無念です。

その高倉健さんの命日に、「再建」を発表。決心されたきっかけは何でしょう。

再建にはかなりの資金がかかりますし、感情面でもなかなか「再建」という言葉を発する勇気が出ませんでした。ですが、本当に多くの方から再建を後押しする署名や励ましの言葉をいただき、もう一度、旦過市場と共に、皆様の集う場を復活させたい。そんな気持ちになれました。

その日を心待ちにしています！

建物も座席もスクリーンも映写機も、何もかもなくなりました。ゼロからの再スタートですが、皆様をお迎えして、笑顔でお会いできるその日まで、一生懸命努めてまいります。今後ともどうぞ昭和館を見守っていただきますようお願い致します。



2022年7月撮影。館内の壁にはイラストレーターの黒田征太郎さんが映画への愛情を込めた直筆イラストが描かれていた

今回のキラリ人 ひぐち ともみ 樋口 智巳さん

1939年に祖父・樋口勇氏が映画館兼芝居小屋として創業した昭和館。2012年に3代目館主に就任して以来、映画館の枠に収まらないイベントを続々と企画。映画人、文化人や俳優にもファンが多い。昨年の旦過市場で起きた2度目の火災で、建物が全焼した。

「北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。」

外平動物総合事務所SALU代表
Sotohira Animal and human Life support Unit
獣医師・獣医学博士　外平友佳理氏

一番好きな動物は「人間」です

「動物が好きなんですね」。そう言われるたびに、違和感を覚えます。私にとって人間も同じ動物、霊長目の1種です。普段の会話で「人間のオス、メス」と言ってしまうのはまだマシで、幼いわが子の手を「前あし」と言った時は、さすがに自分にあきれました。ちなみに、一番好きな動物は人間です。

動物園からペットまで、さまざまな動物を診ていますが苦労ばかりです。両生類は薬物が皮膚から急速に吸収されるので、イソジンはNG、猛禽類（もうきん）はビタミンB群の連続投与で死亡例があり、ヤギに固形物を与えるときは薄切りにしなければ、窒息死する危険があります。それぞれの特徴を知らなければ、治療が裏目に出てしまいます。しかし、珍しい動物の数少ない症例では獣医師としての経験値はなかなか積めず、もどかしいことばかりです。

忘れない。カバのポンチ

最も心に残っているのが、ちょうど20年前のカバのポンチのことです。西鉄から北九州市が引き継いで新たに到津の森公園が開園する2か月前でした。ポンチが体調を崩し、3トンの巨体が立てなくなりました。

横に倒れたままでは、内臓や四肢が体の重みで圧迫され、機能不全となります。飼育スタッフ全員で数時間かけてプールに移し、お湯を何度も運んで水温を上げました。はじめは浮いて、食欲もあったので投薬もできました。それができなくなると、溺れないよう水を抜き、代わりに大量のワラを敷き、3㎝以上ある皮膚への注射は麻酔銃の空気圧で打ち込みました。倒れて2週間足らずでポンチは亡くなり、大きな動物の前に「なんて無力なんだろう」とがくぜんとしました。デッキブラシで背中をかいてもらうのが好きだった穏やかなカバ。彼にもっと生きてほしかった。そして何よりも、40年間、市民に愛されてきたポンチとの再会を楽しみにしている人たちに、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

どんな生き物にも心がある

動物園に長くいると「どんな生きものとも気持ちが通じ合える」ことに気づきました。餌だけが目当てではなく、飼育する私たちが来ることを喜んでくれます。魚にも感情があること、仲間の死を悼む動物が少なくないことなど、近年、ようやく生き物の心を解明する科学が進んできました。経験では分かっていたことが、証明され始めたのです。ああ、生きもの全てがなんて魅力的なんだろう。

2019年、「どうぶつたちとくらそう」をモットーにフリーランスの獣医師として活動を開始しました。この素晴らしい地球の未来のためにますます励んでいきたいと思います。



今回の筆者
そとひら　ゆかり
外平 友佳理氏

到津の森公園（北九州市小倉北区）をはじめ動物園で20年勤務。2019年9月にフリーランスとして独立。現在は往診スタイルで、幅広い動物種に対応した訪問診療を行う。環境保全活動・社会教育活動・地域支援活動などにも精力的に取り組む。

「北九州のキラリ人（びと）からの1,000文字。」

浄土真宗本願寺派永明寺
住職　松﨑智海氏

春は変化の季節。

お釈迦様が説く「変化」とは。

新しい季節が、なぜかせつない日々なのは変化するからです。私たちは変化が嫌いです。お茶碗が割れることも変化です。人の心がわりも変化。病気や老いや死も変化と言えるでしょう。自分にとってどう影響するのか分からない変化は不安をもたらします。そんな不安が私たちをせつなくするのです。

お釈迦様が弟子たちにこんな話をされたそうです。

「二人の旅人が川岸にたどり着き、向こう岸に渡ろうとしました。周囲には渡れそうな場所はなかったので、旅人は草木を使って筏(いかだ)を作り無事に渡ることができました。向こう岸についた旅人は思いました『この筏はなかなか役に立ちそうだ。せっかくだからこれを担いで旅を続けよう』と。はたしてこの旅人の選択は正しいでしょうか?」

そう聞かれた弟子たちは、「旅人は間違っている」と答えます。いくら役に立つからといって筏を担いで旅を続けることはいいことだとはいえません。そこに置いていくべきだと口々に言う弟子たちを見てお釈迦様は微笑み「その通りです。どんなに役に立つものであっても捨てるべき時がきたら捨てるべきです。そしてそれは私の教えであっても同じです」と説かれたそうです。

仏教と言うと頑なに教えを守り続けるイメージがありますが、意外とそうでもないのです。仏教こそ時代に合わせて大きく変化してきました。お釈迦様は「私たちの世界で変化しないものは何一つない」と説かれています。これを仏教のことばで「諸行無常」と言いますが、すべてのものは変化するということを理解せず、変化しないことに執われることが苦しみを生むと言われています。執われる心こそが苦の原因なのです。この執われる心を煩悩と言うのです。

新しい季節は大きな変化の季節です。新しい環境、新しい課題、新しい関係。どれも不安がつきまといます。しかし、すべては変化するものであるということを自然体で受け止めることも大切ではないでしょうか。

世界は変化し続けています。それは流れ続ける川の流れのようなものです。その流れに流される笹船を止めることはできません。しかし、その笹船の行く方に、川の流れと同じ速さで岸を歩いてみると、笹船は止まって見えます。全てが変化する世界において、変化させないようにするためには、変化をしていないといけないのです。変化を望むも望まないも、やはり一歩を踏み出さないといけないのではないでしょうか。



今回の筆者
まつざき ちかい
松﨑 智海氏

浄土真宗本願寺派永明寺（八幡東区川淵町）の住職。TwitterやYouTubeなどを使った発信、西日本新聞の連載や「だれでもわかるゆる仏教入門」など著書も多数。仏教やお寺の魅力を楽しく発信し、「バズる住職」として県内外に広く知られる。